

my name is blue

キクチイサオ

登場人物

立花静夫 (45)	ピアノ奏者
小林良一 (60)	喫茶店店主
小川春子 (25)	喫茶店店員
天城直竹 (83)	常連客
藤間天朗 (43)	フリーライター
鈴木清美 (25)	工場の事務員
日暮里エレキ (25)	お笑い芸人
日暮里テル (25)	お笑い芸人
清水小枝 (25)	ウッドベース奏者
佐藤千鶴 (25)	ギター奏者
長谷川青 (25)	静夫の一人娘

○ タイトル

（ジャズピアノの演奏にのせて。明るくて軽快で、シンプルな曲。）

○ 町工場の風景 1（夕方）

工員たちがトラックの荷台から材料を下ろしている。

金属加工工場の仕事場が見える。工員たちが機械を操作して働いている。

○ 町工場の風景 2

仕事を終えた工員たち、心地よくくたびれた様子で工場から出てくる。

○ 下町の路地

家の住人が玄関横の植木にじょうろで水をやっている。

○ 商店街

家路につく人の姿がちらほら見える。空

き店舗ばかりで、ほとんどシャツター通りになってる。

○ 小さな公園

小さな女の子がすべり台に上がっていく。母親はすべり台の下にいる。

（オープニングクレジットここまで。）

立花静夫（45）、ベンチの端っこに縮こまるようにして座っている。着古した厚ぼったいツイードのジャケットの襟を立てて首を埋めるようにしている。

女の子がすべり台をすべって下りてくる。母親が下で受け止める。

立花、すべり台で遊ぶ女の子と母親を見ている。

膝の上に置いた手の指先が、ピアノを弾くように動いている。

女の子はもう一度すべり台に上がっていき、すべって下りてくる。母親が受け止める。パツ、と女の子が笑顔になる。

立花、サツと立ち上がり、ポケットに手を突っ込んで歩いていく。

○ 黒味

『1. pianist』

○ 商店街（夜）

人通りはない。

○ 喫茶コバヤシ・外

商店街の片隅。『喫茶コバヤシ』の小さな看板が道に出ている。ひび割れをテープで補修した看板がぼんやりと光っている。

○ 同・店内

水飲み鳥がある。コップの水が空っぽなので動いていない。

店内にはカウンター席とテーブル席がいくつか。店の広さとくらべて椅子の数は

少ない。内装は昔ながらの喫茶店で落ち着いた雰囲気がある、が気の利いたインテリアや観葉植物などはなく、色味がなくて殺風景。あちこちが古びていて、傷んだままになっている。

小林良一（60）、カウンターの端で静かにコーヒークップを磨いている。白髪頭と髭をだらだら伸びたままにしている。

天城直竹（83）、壁際の指定席で居眠りをしている。テーブルに読みかけの経済雑誌が数冊。部屋着の半纏を着ている。

藤間天朗（43）、奥のカウンター席に座り、ノートパソコンを前にしてうなだれている。貧乏ゆすりをしている。

鈴木清美（25）、工場の事務員の作業着姿のまま携帯電話をいじっている。

携帯電話の画面。難しいパズルゲームをすごいテクニクで攻略している。

他に常連客の工員たちがぼっんぼっんと孤独な時間を過ごしている。しん……、

としている。

○ 同・外

立花、歩いてくる。

ドアに『OPEN』の札。立花、ドアを開けて入る。

○ 同・店内

立花、小林に小さく会釈する。

小林、小さく手を上げて応える。

立花、店内を横切って奥へ行く。

隅に古いアップライトピアノがある。

立花、持っていたジャズの楽譜集をピアノ

の譜面台ではなく上屋根に置き、上着

掛けにジャケットを掛ける。椅子に座り、

鍵盤蓋を開ける。なんとなく店内の客を

確かめて、壁掛け時計に目を向ける。

壁掛け時計が八時をさしている。

立花、演奏を始める。静かでシンプルな

スタンダード曲を弾く。

天城、居眠りしたまま。

藤間、相変わらずノートパソコンの前でうなだれている。

清美、ちらっと立花の方に目をやっただけで、携帯ゲームを続ける。

小林、最後のコーヒーカップを磨き終わり、また最初のカップを磨き始める。

\* \* \*

立花、鍵盤蓋を閉める。

壁掛け時計は十時を少し過ぎている。

客はいない。

小林、立花にコーヒーを持ってくる。

小林「お疲れさん」

立花、コーヒーを受け取る。

小林「あと、今月の」

と、封筒を差し出す。立花、会釈して受け取る。

小林「もう少し出せるよ。車、売っちゃったし、ガソリン代浮いたから」

立花「(恐縮して首を振る)」

小林「貧乏が、顔に出ちゃってんのかな」

立花「（コーヒーを一口）」

小林「……出ちゃってんだな」

と、テーブルを拭き始める。

立花、コーヒーを飲みながら、なんとなく店内に目を向ける。

客の帰った後の店内は一段と静か。遠くで車のクラクションが連続で鳴る。再び静かになる。しばらくして、突然ドアが開き、静寂が破られる。

立花、

小林、びつくりしてドアを見る。

小川春子（25）、顔を出す。

春子「……やってます？」

小林「えっと、もう……。あ、でもいいですよ。看板の明かり付いてたでしょ、まだ」

と、見慣れない顔に作り笑顔をしつつ、

春子を招き入れ、カウンターへ移る。

春子、ニコニコ笑いながら、歩き疲れた様子で大きなカバンと段ボール箱を積ん

だ車輪付の荷台を引っ張って入ってくる。  
手持ちの洋服など身につけるものを全部  
重ね着して着ぶくれしている。

○ 同・外

看板の明かりはついたまま。

○ 同・店内

春子、カウンター席に座っている。上着  
を脱いで、スッキリした格好になってい  
る。

春子「で、いくらだったと思います？」

と、ズズーツと鼻をすする。

小林の声「さあ」

春子「八円。八円ですよ、八円。見たことあ  
ります？ 八円しか入ってない財布」

小林の声「いやあ、さすがにそれは」

春子「でしょ？ びっくりして、あまりのお  
金の無さに。こんなに無いか、と思って。

逆になんで八円残ってんの？ この八円な

に？ こわっ、って思っで。八円だけ残ることってあります？」

小林、カウンターに向こうで、春子との間に少し距離を開けて、作り笑顔の横顔で話を聞いている。

小林「さあ……あるんじゃないですかね。僕はないけど」

春子、コーヒーカップ片手に話を続ける。

春子「そしたら大家さんが、八は末広がりでから縁起が良いよー、って。家賃払えないなら出てけって言ったばっかの大家さんが、ですよ。カーツ、ってなつて、このババアなに言つてんだ、大家さんおばあちゃんなんですけど、このババアつてなつたけど、でもまあ半年？ あ、（指折り数えて）八ヶ月か。家賃払ってなかったし、こつちも悪くなつて思っで。……八ヶ月、また八だ。何なんですか？ 八ばっか」

小林「ねえ。ホント」

春子「で、まあ、アパート追い出されちゃっ

たんですけど。友達に泊めてくれって頼んだけど、皆に断られちゃいました」

と、ニコニコ笑いながら、

春子「……ってことで、今度でいいですか？

お金」

小林「いいですよ」

春子「……すんません」

小林「そう……ね。まあ……なんか食べる？」

春子「……（目を丸くして）」

小林「いいよ」

と、冷蔵庫を開けて食材を物色する。

春子「……八だ。八のパワーでいいことあった」

小林「（笑って）今晚どうすんですか？」

春子「うーん……適当に探します」

小林「明日は？」

春子「も適当に探します。私、屋根があれば

ヘーキなんで」

小林「寒いでしょ」

立花、ずっと前に飲み終わってしまった

コーヒーカップを持って余している。静かに椅子を立って、ジャケットを着て、楽譜集を持つ。

コーヒーカップをカウンターに返し、小林にちらつとあいさつする。

小林「あ、お疲れさん」

立花、春子の方を見ずに会釈だけして、店を出ていこうとする。

春子「一曲くらい聞かせてくれんじゃないかなあつて、期待してたんだけど、なア」

立花「（立ち止まる）」

春子「いかにも、って感じで座ってんのに、話しかけんなオーラがすごいんだもん。だから空気読んだケド」

立花「（背中を向けたまま会釈する）」

春子「あんたにピアノなんかわかんねえだろう、みたいなの？」

小林「疲れてんだよ。たくさん弾いた後だから、ね？ それより、ホレ」

と、小倉トーストを出す。

春子「ウツソ、大好き」

小林「甘い物好きと見た」

春子「正解。何で？」

小林「コーヒーをブラックで飲む人は甘党が多い、っていうのが僕の持論」

春子「すごい。ホントそう」

小林「遅い時間だけど、大丈夫でしょ？ 若いから」

春子「えー、太るとか？」

小林「いやいや、胃。胃もたれ」

春子「胃もたれ？ あんこで胃もたれます？」

小林「あんこでっていうか、遅い時間に食べると、朝起きた時にもたれるでしょ？ 胃」

春子「もたれます？ 胃」

小林「もたれますよ。胃」

春子「もたれるかなあ？ 胃」

小林「もたれるもたれる、胃」

春子「もたれるもたれる言われると、非常に食べにくい……」

と、ピアノの音。春子、小林、音の方を

向く。

立花、いつものように静かでシンプルなスタンダード曲を演奏する。

春子、立花の演奏を聞きながら、ホツとしたように大きいため息をつく。頬杖について演奏を聞く。小林、春子のカップにそつとコーヒーのおかわりを注ぎ足して、カウンターを離れる。春子、目を閉じる。

(F・O)

○ 黒味

『2. novelist』

○ 喫茶コバヤシ・店内(夜)

水飲み鳥がコップの水を飲んで、大きく揺れる。

○ 同・外

立花、歩いてくる。

○ 同・店内

立花、ドアを開けて入ってくる。途端に  
明るい声が飛んでくる。

春子の声「あーっ、立花さん。こんばんはー」

春子、エプロンをつけている。客の前に  
コーヒーカップをカチャンと置く。

春子「えつとおお……なんか、今日からここで  
働くことになっちゃいました。あつ、小川  
春子です。新人です。よろしくお願いし  
まーす」

常連客の工員たち、春子の明るく通る声  
につられて笑っている。

天城、いつもの指定席でニコニコしてい  
る。

清美、相変わらず携帯ゲームをしている。

立花、その場で固まって小林を見る。

小林、カウンターで少し困ったように笑  
いながら、立花に頭を下げる。

立花、ピアノに向かう。楽譜集を上屋根

に置き、上着掛けにジャケットを掛ける。  
椅子に座り、鍵盤蓋を開ける。気になっ  
て春子を見る。

常連客の一人、春子に声を掛ける。

客「さっきのもう一回やってよ」

他の常連客たち、うなずいている。

春子「えー、どうしよう。普通の靴だから、

あんまうまくできない」

客「やってよ。ねえ」

春子「安売りしたくないなあ……なんて。立

花さん、なんか弾いて下さい」

立花「……」

春子「明るくて楽しい曲」

立花、小林を見る。

小林、立花と目が合うと、なんとなく目  
をそらしてカッパを磨き始める。

立花、少し考える。

春子「立花さんの気持ち待ちです。もう少し

々お待ち下さい」

客席から小さな笑いがおきる。

立花、ハッ……、と短いため息をついて、  
明るい調子の曲を演奏する。

春子、常連客たちに拍手をうながして、  
恭しくお辞儀する。そして演奏に合わせて、  
器用にタップダンスを踊り始める。

常連客たち、楽しそうに春子を見ている。

小林、楽しそうに見ている。

天城も楽しそうに見ている。

清美、こっそり目を上げて見ている。

春子、目に入った常連客の帽子を取って  
斜に被ったり、お道化て見せたりしながら  
ら楽しげに踊る。

藤間、カウンター席を立ち、ツカツカと

立花に近づく。

演奏の途中で立花の腕をつかむ。演奏が  
ピタリとやむ。

一同、立花を見る。

藤間 「うるさいんだよ……もう少し静かにし  
てくれませんか……」

と、壁に向かって独言のようにボソボソ

と言う。

しん……、とする。藤間、カウンター席に戻り、ノートパソコンの上に覆い被さるようにして座る。

小林、半ば慣れたことのように、横目で藤間の様子を確かめてから、いつものようにカップを磨き始める。

天城、コーヒーの残りをズズツと飲んで、目を閉じる。

清美、携帯電話をカバンにしまつて、帰り支度を始める。

常連客の工員たちも静かに一人の時間を過ごし始める。

店内はいつもの様子に戻る。

立花、鍵盤蓋を閉めて椅子を立ち、ジャケットを取る。ちらつと春子を見る。

春子、藤間のそばに行く。いきなり藤間のカップを奪い取る。

藤間 「(驚いて) 何？」

小林、

天城、

清美、

常連客の工員たち、

そして立花、目を奪われている。

小林「……待って」

春子、カップのコーヒーを藤間の顔めが

けて……、

藤間「(思わず目をつぶる)」

……そのままカウンターに置く。

春子「ぶっかけると思った？」

一同、目を丸くしている。

春子「やんないやんない。バイト初日だもん。

……と見せかけて」

と、ノートパソコンにコーヒーをかけよ

うとする。一同、声を上げる。

春子「(やめて)やんないやんない。弁償で

きないもん」

藤間「(声も出ない)」

春子「(笑いながらも強い口調で)帰れ」

藤間、呆気にとられている。ポケットか

ら小銭を出してカウンターに置き、ノートパソコンを抱えて店を出て行く。

春子「二度と来んなよー」

しん……、としている。

春子「ハイ。じゃあ続き。立花さん、さっきの弾いて。明るいやツ」

立花、ジャケットを着て、楽譜集を手に取る。

小林「立花さん、ちょっと店、いい？」

と、面倒くさそうに頭をかきながら、藤間を追って店を出て行く。

立花、仕方なく椅子に座る。

店内はなにもなかったように、いつもの様子に戻る。

春子、ぽつんと立っている。コツン、とかかとを一つ鳴らす。

○ 同・外

看板の明かりが消えている。

○ 同・店内

小林、磨き終えたカップを清潔な布巾の上  
に等間隔に並べている。

立花、ピアノの前に座ってコーヒーを飲  
んでいる。

店の奥に二階の部屋に上がる階段がある。  
階段の近くに春子の荷物がまとめて置い  
てある。春子、出ていく支度を終えて階  
段を下りてくる。

春子「あの……お世話になりました」

小林「二階の部屋使っているよ。住む場所見  
つかるまで」

春子、黙って頭を下げる。そのまま店を  
出て行くこうとする。

小林「（申し訳無さそうに）藤間さんはね、  
ああ、藤間さんっていうんだけど、あのお  
客さん。一番古い常連さんだからさ……」

春子、ちらっと立花を見る。

立花、他人事のようにコーヒーを飲んで  
いる。

小林「まあ、知らなくて当たり前だし。藤間さん、少し気難しい所あるけど、悪い人じゃないから。謝れば許してくれるかもしれないけど……」

春子、立花に背を向けるようにして、小林にちよんと頭を下げる。

小林「使っていいよ。二階の部屋」

春子、重そうに荷物を引いてドアの方へ歩いて行く。

立花、ピアノの前を離れる。

黙って春子の荷物を持ち、ドアまで運んであげようとする。

春子「……ありがとう」

立花「(重さに驚く)」

春子「(笑って) 重いでしょ」

\* \* \*

春子、古いテープレコーダーにカセットテープを入れる。

春子と小林、テーブル席に座っている。

小林「昔流行ったなあ、コレ。電車の音とか

録音するやつでしよ。たしか高いんだよね」

春子、再生スイッチを押す。しばらくすると、サーツという音が聞こえてくる。

小林、その音に耳を澄ませる。

小林「何の音？」

春子「何だと思います？」

小林「……なんだろう」

春子「雨の音」

小林「あー、雨か」

春子「舞台上で使う用に、こうやって、マイク持って録音したんですけど。こだわりらしくて、コレ使うのが」

小林「舞台？」

春子「あ、私、劇団員なんですよ」

小林「へえー。役者さん？」

春子「一応。ちっちゃい劇団ですけど。それで、舞台上にいろんな音を録音してて」

段ボール箱の中には、古い録音機材や雨の音を録音したカセットテープがぎっしりつまっている。

春子の声「雨の音って、降ってる量とか場所とか、あと時間とか季節とかで全然違うんですよ」

小林「そうなんだ」

春子「傘さしてる時とか、田んぼのそばとか、あと雑木林の中とか。なんか面白くなってきちゃって」

春子、頬杖をつく。

春子「……雨の音聞いてると、なんか元気出るんですよ」

小林「そう？　むしろユウウツな感じじゃない？　僕は好きだけど。落ち着くから」

春子「これから晴れるんだから、だったらもう少し頑張ろうって。だから、逃げちゃいたいけど、逃げたらダメなときに聞くんです。舞台の本番の前とか」

と、無理して笑顔になる。

立花、ピアノの前に座って雨の音を聞いている。

○ 小さな公園（夕方）

すべり台には誰もいない。

立花、ベンチに座ってすべり台を眺めている。

○ 喫茶コバヤシ・外

ドアに『CLOSE』の札。

○ 同・店内

開店前でテーブルの上に椅子が乗ったまま。小林、床の掃き掃除をしている。

春子、階段を下りてくる。エプロンを首からぶら下げている。

小林「ああ。そっちのテーブルの椅子、下ろしてくれる？ 掃除終わったから」

春子「……（ためらう）」

小林「……まあ今日来るかどうかかわかんないけど、出て行く前に一言謝ってさ。その方がスッキリするでしょ？」

春子「でも、立花さんが……」

小林「立花さん？」

春子「私の事、気に入らないみたいだから」

小林「いつもあんな感じだよ。あのおじさん」

春子、エプロンの紐を結んで、テーブルに乗せられた椅子を下ろし始める。

○ 同・店内（夜）

壁掛け時計は七時を少し回っている。

春子「お待たせしました」

と、客にコーヒーを出し、ちらりと壁掛け時計を気にする。

緊張してきて瞬きの回数が多くなる。

小林、春子を気にして、なんとなく目をやる。

藤間、来る。

春子「……（藤間と気付いて思わず黙る）」

藤間、特に変わった様子はなく、いつものカウンター席の奥に座り、ノートパソコンを開く。

小林「いらっしやい……」

と、コップの水を出す。

藤間「ブレンド下さい」

小林「はい」

と、コーヒーの用意をしながら、春子のことが気になって、手元がいかげんになる。

春子、強張った口をほぐすように大きな口を開ける。よしつ、と声に出さずに言い、藤間の傍に行く。

春子「あの……」

藤間「(振り向く)」

春子「(色々言葉を探してから)……すんませんでした」

と、深々と頭を下げる。

藤間「ねえ」

小林、藤間にコーヒーを出す。春子の気持ちを代弁しようと思うが、うまい言葉が出てこない。

小林「……とにかく、すごい反省してんよ、この子」

春子「謝ったもん。ちゃんと」

と、少し不貞腐れたように唇を尖らせる。

小林「春ちゃん」

春子「だって」

藤間「いや、頼みがあるんだけど」

と、春子の方に向き直って、

藤間「コーヒーかけてくんないかな」

春子「……ハイ？」

藤間「ぶっかけてくんないかな」

春子、小林、顔を見合わせる。

藤間「かけてくんなかったじゃない、結局。」

だから、かけてほしいなって思っで。思っ

つきり」

春子、口を開けたまま、しばらく考え込  
む。

春子「……そういう人？ 趣味の方……です  
か？」

藤間「……趣味？」

春子「あの……うん、やっぱりそういうのは、  
プロの方と言いますか、専門家の方にお

願いするのがいいと思うんですけど。（小林に）ねえ？」

小林「え？ まあ、うん。……モチはモチ屋  
って言うし」

藤間「こう見えて僕……」

春子「どうもこうも、見えてないですよ。あ  
っ、見えてる。ん？ 見た感じとか、では、  
っていうか、そんなの関係ないじゃないで  
すか。何に喜びを感じるのかなんて自由だ  
し、叩かれたり、縛られたり、ローソクを  
こう……」

藤間「小説家を目指してるんですよ。今はフ  
リーライターみたいな、二百文字の映画の  
紹介文とか、健康食品の広告の記事とか、  
そんな仕事ばかりだけど」

天城、指定席から割り込んでくる。

天城「SM小説だ」

小林「あ、書く方の」

藤間「なんの話ですか？」

春子「……なんの話ですか？」

藤間 「だから、小説を書きたくて。よくある  
じゃないですか、顔にコップの水かけるや  
っ」

小林 「ああ。映画とかドラマでよく見るけど、  
実際には見たことないやつだ」

藤間 「あれって、かけられた方ってどんな気  
持ちなのかなって。あと、その後どうすん  
のかなと思って、びしょびしょになって。  
主人公はヒロインの女の子から水をひっか  
けられるんですよ。それが出会いの場面で。  
そういう恋愛小説」

小林 「最悪の出会い、から始まって」

藤間 「そうです」

小林 「そこから結ばれる、と」

藤間 「そうそう」

春子、眉間にしわを寄せて、事情が飲み  
込めていない様子。

春子 「……で、SM……」

小林 「それはもういいの。勘違いだから」

春子 「勘違い？」

小林「うん。恋愛小説だって」

春子「……。結局、怒ってないってこと？」

藤間「なんで怒るの？ 怒ってないよ。逆に悪かったね。書きたいことがまとまなくて、イライラしててさ。あなたのおかげで、こう、先が見えた感じ？」

春子「怒ってないのか。なアんだ」

ふわっ……。と場の空気が和む。

春子、少しもためらうことなく、藤間にコーヒーをぶっかける。

藤間「あっつ！」

小林「ちよっ……。なにしてんの！」

春子「ぶっかけてって」

小林「言ったよ。言ったけど違うじゃん、聞いてた？ 話」

春子「聞いてたよ。怒ってないって言った」

天城、笑っている。

清美、携帯ゲームを忘れて、笑いをこらえながら見ている。

小林、大量のおしぼりを藤間に押し付け

るように渡して、

小林「あと、水あるでしょ、水、コップの水、そこに。なんで熱いコーヒー……」

春子「あ、そっか」

と、藤間にコップの水をぶっかける。

小林「違うじゃん！」

\* \* \*

立花、ゆつくりとドアを開け、顔だけをのぞかせて店内の様子をうかがう。

春子、カウンター席のテーブルを拭いている。

藤間、テーブル席に移ってノートパソコンのキーを打っている。小林に借りた、似合わない色のパーカーを着ている。

清美、携帯電話をしまつて、小倉トーストを食べている。

立花、店内に入ってくる。天城と目が合う。

天城、指定席でニツと笑いかけてくる。

小林、カウンターでカップを磨きながら、

立花に気付いて、

小林「(小さく頭を下げる)」

春子、立花に気付いて、

春子「こんばんは」

立花、ピアノの前に行く。楽譜集を上屋根に置き、上着掛けにジャケットを掛ける。椅子に座り、鍵盤蓋を開ける。なんとなく店内の客を確かめる。

藤間、立花と目が合って、伏し目がちに小さく頭を下げる。

立花、少し手を上げてそれに応える。壁掛け時計に目を向ける。

壁掛け時計は七時五十分くらいをさしている。

(F・O)

○ 黒味

『3.comedians』

○ 商店街(夕方)

学生服姿の中学生男子が二人、バカ話で笑いながら帰宅する。

○ 喫茶コバヤシ・外

春子、店先で暇そうに体操をしている。

小林、散髪屋から帰ってくる。髪と髭がさっぱりと短くなっている。

小林「ただいま」

春子「良い！ シブい！」

小林「やっぱ髭、残してもらったわ」

春子「ウンウン。似合う」

小林「小綺麗にしておかないと。客商売ですからね、一応」

と、春子のとなりに並んで、一緒に体操を始める。

小林「体、やわらかいね」

春子「ストレッチはやってるんで。劇団員で

すからね、一応」

小林、春子のまねをしてストレッチをするが、だいぶ体がかたい。

春子「立花さんって、長いんですか？」

小林「うーん……忘れた」

春子「どんな人ですか？」

小林「普通のオッサンだよ。ピアノが弾ける」

春子「いい人ですか？」

小林「悪い人じゃないな」

春子「プロの人なんですか？　なんか、いつ

つもおんなじような、暗い曲ばっか弾いて

る気がするけど」

小林「さア、わかんない」

春子「話したりとかしないんですか？」

小林「……。まア、お互いいい年だし、その

へんはいいんじゃないの。イテテテ……」

春子「ふーん……」

日暮里エレキ（25）、日暮里テル（25）、

歩いてくる。看板を見て、立ち止まる。

小林「いらっしやい。やっていますよ（と、髪

と髭を一撫で）」

○ 同・店内

客はエレキ、テルの二人だけ。隅のテーブルに壁の方を向いて座り、奇妙な身振りをしてながらボソボソと喋っている。

小林、いつものようにカップを磨きながらも、つつい二人が気になって、チラチラ見てしまう。

春子、二人に興味を持って、テーブルを拭くふりをしながら、さりげなく背後に近づく。

エレキ「どーもー。エレキでーす」

テル「テルでーす」

エレキとテル「二人合わせて日暮里エレキテルでーす。ビリビリ！（決めポーズ）」

二人は日暮里エレキテルという若手の芸人コンビで、小声でネタの練習をしている。エレキの方は、細身で肩より長い髪の毛をびっちり真ん中分けにしている。テルの方は、ブランド物のジャージ姿で、金髪をイガ栗のように尖らせている。

テル「……このビリビリ、だけどさ」

エレキ「うん」

テル「手の形をもっと……（挑発的なポーズを取って）この方がカッコエよ」

エレキ「えー、ダメだよ」

テル「何だよ」

エレキ「かっこいいのとかダメだよ」

テル「いいじゃねえかよ。ビリビリ！」

エレキ「あと、そんな感じの前に誰かがやってんの見たよ」

テル「……。じゃダメか。ポツポ師匠に怒られるもんな」

エレキ「パクリ、ダメ、ゼツタイ。だもん」

テル「……。ポツポ師匠のそれもさ」

エレキ「やっぱ今まで通りに」

テル「ん？」

エレキ「二人が、ちゃんと対称になるようにしてさ、ビリビリ！（決めポーズ）」

テル「お前、もっとおもしれえ顔しろよ」

エレキ「してるよ」

テル「だから、それがつまんねえって言って

んだよ」

二人はお互いの顔を見ながら、つまらない面白い顔を色々作ってみる。春子、苦手な虫か何かを見るような表情で、こっそり覗き見している。

エレキ「ポツポツ師匠嫌いじゃなかったっけ？

顔で笑い取るの」

テル「だって顔ぐらいしかねえじゃんかよ。

笑えんの」

エレキ「……。じゃ作ってよ、ネタ」

テル「ヤダよ、めんどくせエ」

エレキ「前にも言ったけどさ、そういうところ

じゃないの？」

テル「うるせエな。俺あデスクワークはしね

え主義なんだよ。ポリシーだよ」

エレキ「……。顔はいいからさ、ネタ練習し

よ」

春子、二人の背後で聞き耳を立てている。

エレキとテル、大学ノートを覗き込みな

がら、小声で読む。

エレキ「日暮里エレキテルのショートコント。  
友人をなぐさめる言葉その一。僕もうダメ  
だよ。仕事は続かないし、お金もないし、  
彼女も出来ないし……。もう生きてる意味  
なんかないんだ」

テル「そんな事ねえって」

エレキ「なぐさめないでくれよ。余計みじめ  
になるじゃないか」

テル「イヤイヤ。お前カッコイイよ」

エレキ「僕のどこがカッコイイって言うんだ  
よ。教えてくれよ」

テル「ほら、あの人に似てるよ、あの人」

エレキ「……誰だよ、あの人って」

テル「ほら、よく見るんだけどなあ」

エレキ「……えっ？　もしかして、芸能人？」

テル「ほらほら、えつと……誰だっけ」

エレキ「ねえねえ、誰？　早く教えて」

テル「あ、近所の八百屋のおじさんだったあ」

エレキ「芸能人じゃないのかよー」

エレキとテル「うーん……ビリビリ！（決め

ポーズ」

春子、無表情。

テル「……ンだよ、コレよお。クソつまんね  
えじゃねえかよ」

エレキ「えー、だって八百屋のおじさんに似  
てんだよ。面白いじゃん」

テル「なんで面白いんだよ。八百屋のオヤジ  
がめっちゃイケメンだったらどーすんだよ」

エレキ「……。だって高橋さんとこのおじさ  
ん、イケメンじゃないし」

テル「誰だよ、高橋ってよお」

エレキ「ウチの近所の八百屋の……」

テル「知らねーよ。八百屋のオヤジはブサイ  
クって、ただの偏見じゃねえかよ」

エレキ「……」

テル「それかさ、似てるって言われて、それ  
が芸能人じゃなくて誰も知らない八百屋の  
オヤジだった、っていう所が面白いワケ？」

エレキ「……面白い」

テル「だったら最後のツツコミが弱いだろお。

何だよ、芸能人じゃないのかよーって。誰だよ、知らねーよ！ だろーがよお」

エレキ「……そっか」

テル「ブサイクなヤツに似てるって言われる所が面白いんだったら、八百屋のオヤジじやなくて、みんながイメージできるブサイクじやなきやダメだろうがよ。ハダカデバネズミとかダイオウグソクムシとか、みんな知ってる」

エレキ「みんな知らないよ」

テル「ダメ、却下。他は？」

エレキ「これがダメなら他のもダメだよ」

テル「なんで八百屋のオヤジで縛ってんだよ」

春子、二人の背後から近づいてきて、軽く咳払いして、

春子「あの……」

エレキ「あ……ごめんなさい」

春子「いや、そうじやなくて。もしかして……」

…芸人さんですか？」

テル「え？ 知ってるの？ 俺らのこと」

エレキ「知ってる人なんていないよ」

テル「わかんねえだろ」

春子「あの……練習するんだったら、もつと

大きな声でやったらどうですか？」

エレキ「でも、迷惑じゃないですか？」

春子「大丈夫ですよ。暗くなってからだから、

常連さん来るの。それに私、ちゃんと見て

みたいなあ」

テル「(いい気になって) そう？ 見たい？」

春子「見たい見たい」

エレキ「えー……イヤだよ……早いよ、まだ。

自信ないし」

テル「そんなんでどうすんだよ。ここで出来

なかつたら、ポップ師匠の前で出来るわけ

ねーだろ」

エレキ「……そりゃそうだけど」

テル「Nothing ventured, nothing gained.

だろ、とにかくやろうぜ！」

\* \* \*

小林と春子、椅子を並べて座っている。

エレキとテル、二人の前に立ってネタを披露している。

テル「いくら客って言ってもさ、他のお客さんに迷惑かけても気にしないなんて、許せないじゃない。だからさ、俺バイト代表して言っただよ」

エレキ「うんうん、何て？」

テル「おい！ そのお前！ お前だよ！

全裸にチーズバーガー一丁で、出来ないムーンウォークしながら、『第九の歓喜の歌』を熱唱して号泣してるお前！ お前だよ！

お前しかいねーだろうが！ おい！

エレキ「そうそう、言っただよ」

テル「ご一緒にポテトもいかがですか？」

エレキ「それじゃあSサイズ下さい……って  
おい！」

エレキとテル「うーん……ビリビリ！（決めポーズ）」

小林と春子、無表情。

エレキ「……っていう、まあ、こんな感じな

んですけど……」

春子「……あ、終わり？ どうでした？」

小林「僕？ いや……いいんじゃない？」

春子「（エレキに）あのお、何が面白いんですか？」

小林「ちよっ……そういう言い方」

春子「そうじゃなくて、どういう所が面白いのかなあっていう」

小林「ああ。笑いのポイントみたいなの？」

春子「うん」

エレキ「……何が面白い」

小林「いや、面白かったよ。ただ僕はその、あんまり若い人のお笑いとかわかんないから」

エレキ「やっぱりダメだ……」

春子「面白いですって、たぶん」

と、拍手する。小林、大きく拍手する。

テル「このさ、ビリビリの手の形がこう……」

こつちの方がいいって」

エレキ「ポツポツ師匠に怒られるよ」

テル「でもさ」

春子「……あの、さつきから気になってたんですけど、ポップ師匠って？」

エレキ「あ、僕らの師匠です。鳩山ポップ。知りませんか？」

春子「ううん、知らない」

小林「（春子を肘で小突く）」

エレキ「癒し系漫談とか言われて、ちよっと話題になったりした、らしいんですけど。

実際よく知らないんですけど」

小林「僕は……うん。聞いた事ある、ような（と苦笑い）」

エレキ「で、今度ポップ師匠にネタ見てもらえる事になって。その練習をしてて」

春子「ポップ師匠って恐いんですか？ さつきからすごいビビってるけど」

エレキ「恐いって言うか……笑ってるところ見たことないよね」

テル「ねえ。舞台じゃニコニコしてっけど」

エレキ「あだ名が『鉄仮面』ですもん。クス

リともしないで、じーつと若手のネタ見る  
んですよ。で、つまんないネタでもやろう  
もんなら、そりやもう……（と口をつぐむ）  
」

春子「……もう？」

テル「静かにナイフでめった刺しにされて、  
腹引き裂かれて、ハラワタゆっくり引きず  
り出されて、最後に首をこう（と手刀で首  
を切り落とす）」

春子「えっ……」

エレキ「いまだにダメ出しが夢に出てくるっ  
て言って、カウンセラーに診てもらってる  
先輩もいますよ。二、三人。いや、もつと  
かな」

小林「（思わず背筋を伸ばして）熱心なお師  
匠さんだね」

春子「ポッポ師匠……ポッポ……ポッポ……」

と、二の腕あたりが寒くなって、なぜか  
背後を確認してしまう。

エレキ「ネタ作り直す？」

テル「あたりめえだろ」

春子「ちよつと待って。たまたま私たちがつまんなかった（と言ってしまつて、しまつたと思ひ）……他の人は面白いつて思ふかもしれないじゃん？」

○ 同・外（夜）

看板の明かりが消えている。

○ 同・店内

立花、ピアノの前に座っている。空っぽのコーヒーカップを手持ち無沙汰にいじっている。

小林、カウンターの奥に座つてウトウトしている。

春子、テーブル席をどかして作つた即席の舞台スペースに立つて、入口のドアの方をチラチラ気にしている。

立花、小林の方を見る。

小林、カクンと船をこぐばかり。

立花、椅子を立つ。コーヒーカップと楽

譜集とジャケットを持って帰り支度を始める。

エレキ、静かにドアを開けて顔を出す。

エレキ「あの……」

テル「邪魔だよ」

と、エレキを押し退け店内に入る。

テル「春ちゃん、お待たせ」

春子「遅いよ！ なにしてんの」

エレキ「すいません。ちよつと取りに戻って  
て」

と、紙袋を抱いて入ってくる。

小林「いらつしやいませ（と寝ぼけて目を覚  
ます）」

春子、エレキの手を引つ張って行き、

春子「ここ、舞台ね」

エレキ「え、すぐやるの？」

春子「当たり前でしょーが、何時だと思って  
んの。みんな待たせてんだから」

と、次に立花のそばに行く。少しためら  
いつつ、立花の腕を取って引つ張ってい

き、用意した椅子に座らせる。小林、あ  
くびをしながら立花のとなりの椅子に座  
る。

春子、司会者の位置に立つ。

春子「じゃあ出る所からね。どうするんです  
か？ 上手から二人一緒に？ それとも上  
下、別れる？」

エレキ「え……つと、上手から。はい」

立花、楽譜集とジャケットとコーヒーカー  
ップをどう持ったらいいのか迷いながら、  
春子の顔と小林の顔を交互に見ている。

小林、またウトウトし始める。

春子、改まったように声の調子を整えて、  
春子「えーつと。それじゃあ……ウン、今人  
気急上昇中の若手お笑いコンビ、日暮里エ  
レキテルのお二人です。どーぞー（と拍手）」

小林、寝ぼけ眼で拍手する。立花、両手  
がふさがったまま、とりあえず拍手。

エレキ、立ち尽くしている。テル、春子  
の方をチラチラ意識しながら、尖った髪

をいじっている。

春子「……どーぞー」

エレキ「あの……（立花を指して）こちらの  
方は？」

春子「あ、この人が仮想ポツポ師匠ね。立花  
さんを笑わせられたら、ポツポ師匠もきつ  
と大丈夫だよ」

立花、小林を見る。小林、再びウトウト  
し始める。立花、椅子を立つ。コーヒー  
カップを戻そうとして、カウンターに向  
かう。

春子「（少し改まった様子で）お願いします。  
立花さん」

立花、少し立ち止まって、春子の言葉を  
背中で聞く。

春子「なんでいつもむずかしい顔してるんで  
すか？」

立花、再びカウンターの方へ歩き出す。

春子「娘さんにもそういう顔するの？」

立花、コツンとコーヒーカップをカウン

ターに置き、

立花「（春子を振り向く）」

春子「ほら、座って」

立花、動きが止まる。

春子、ニツコリして椅子を差し出す。

立花、思わず戻ってきて椅子に座る。小

林、ウトウトしている。

春子「では改めまして、令和の爆笑王こと、

日暮里エレキテルです。どーぞー」

と、一人で拍手する。

エレキとテル、突っ立ったまま。

エレキ「なんかネタやる空気じゃないんです

けど……」

春子「じゃ空気変えて。はい、どーぞ！」

と、大きく拍手をして、立花と小林に拍手をうながす。

立花、春子になにか言いたげだが、思わず拍手してしまう。小林、目を覚ます。

エレキとテル、取り敢えず舞台スペースに立つが、やるはずのネタを忘れている。

テル「……何やんだっけ？」

エレキ「そうだ、これ」

と、持ってきた紙袋の中から、おそろいで色違いの大きな蝶ネクタイを取り出して、そそくさとつける。

エレキ「で……何だっけ？」

テル「ハンバーガー屋のか」

エレキ「それ、やったよ。やって、スベったよ」

テル「そっか。……何だっけ？」

エレキとテル、なぜか立花を見る。

立花、困って二人を見返す。

エレキ「……慰める言葉シリーズは？」

テル「ああ……どうすんの？ 一からやんの？」

エレキ「えつと……一番おもしろいのって何番？」

テル「全部つまんねえよ」

春子「ちよつと！」

と、二人の間に割って入る。

春子「何やってんの。二人でブツブツ言い合  
ってさあ。イライラすんなあ」

エレキ「いや、だから……」

春子「だから、じゃないでしょ？ ポツポ師

匠の前でもそうやんの？」

エレキ「……それは」

春子「めった刺しにされて、ハラワタ引きず  
り出されんでしょ？」

立花、えっ、と目をパチパチする。

春子「ほら早く、何かやんなさいよ」

テル「いや、春ちゃんね。俺らの笑いつての

はさ、何かやって、とかそういう次元じゃ

なくてさ、もっとこう、緻密に計算された」

春子「で、結果これじゃん」

テル「……」

春子「突っ立ってるだけじゃん」

エレキ「……はい」

春子「ネタ飛んだら飛んだでさ、何かやんな

さいよ、一発ギャグとか何でもいいから。

ないの？」

エレキ「僕はそういうのは……」

春子「芸人でしょ？」

テル「じゃあ俺が」

と、ピースサインをグッと前に出し、

テル「執行猶予、ゲットだぜ！」

春子「……。何だそれ、笑えるか！ 半分パ

クリじゃん！」

エレキ「（くすくす笑っている）」

春子「身内が笑うな！ あとアンタ。そもそも

もだけど」

テル「何？」

春子「その頭なんなの？ 叩きにくいわ、ト

ゲトゲで」

テル「カッケエだろ。惚れんなよ」

春子「（テルの尻を思い切り蹴る）」

テル、倒れる。なかなか起き上がれない。

立花、小林、目を丸くしている。

春子「よわっ。あんた日暮里エレキってんで

しょ？ エレキでしょ？ エレキっていう

なら、もっとエレキっぽくさ、ケンカ強そ

うな感じでさ」

テル「テルです。僕」

春子「は？」

テル「テルの方です」

エレキ「（手を上げて）僕、エレキです」

春子「逆だろーが！ どー見てもこっちがエレキじゃん。エレキっぽいじゃん。それで

頭ツンツンにしてんじゃないの？」

テル「趣味です」

春子「知るか！ あんたの趣味なんて」

エレキ「パンクバンドとか好きなんですよ」

春子「だったらもつとしつかりキヤラ作れよ。

中途半端じゃん。頭だけそんなふうにして

たって、意味わかんないもん」

テル「はあ……（不貞腐れて）」

春子「なんだ、文句あんの？」

テル「別に」

春子「言いなよ。聞く」

テル「輝男っていうんすよ、本名が。田中輝

男。で、そこからあ……」

春子「(テルの尻を蹴る) 終わってんだよ、

その話は！」

テル、倒れる。なかなか起き上がれない。

春子「(エレキに) あんたは？」

エレキ「ヘッ？」

春子「名前」

エレキ「……僕も蹴るんですか？」

春子「場合による」

エレキ「福沢です」

春子「(ゆっくり間を取って) ……下は？」

エレキ「諭吉です。福沢諭吉」

春子「(エレキの頭を叩く) ボケるならもつ

と声張れや！」

エレキ「(しゅんとなつて) 本名です」

春子「は？ ボケたんじやないの？」

エレキ「はい。だから聞いたんです。僕も蹴

るんですかって。叩かれたけど」

春子「(エレキの尻を蹴る) つかみで言えよ

！ 名前が一番面白いじゃん！」

エレキとテル、蹴られた尻をさすりなが

ら、黙ってうつむいている。

立花、小林を見る。小林、小さく首を振って、立花の肩を叩いて仲裁役を押し付けようとする。

春子「……なに！ なんなの！ もっと元気出してよ！」

エレキ「暴力やめて下さい」

春子「は？」

エレキ「暴力やめて下さい。テル君はこう見えて繊細なんです。暴力とか、苦手なんです」

テル「（エレキに）いいよ、もう」

エレキ「テル君、お坊ちゃん育ちなんです。割り箸は使った後にちゃんと袋に入れて捨てるし、中学の修学旅行の時は電動歯ブラシ持ってきたし、実家でプードル飼ってるし、トイレじゃなくて大きい方の。だから、慣れてないんです、暴力に」

テル「もういいって」

春子「どーでもいいけど、暴力っていうのや

めてくれる？」

テル「メアリーです」

春子「なにが？」

テル「プードルの名前」

春子「一ミリも興味ねーわ」

エレキとテル、しゅんとする。

春子「一番大事なのはさ、人を笑わせたいって気持ちじゃないの？ ネタがどうのこうの言うより、目の前の人を笑わせたいっていう気持ちだ！ 大事なんじゃないの？」

エレキとテル、一段としゅんとなって、うつむいて黙ってしまふ。

立花と小林、まだ押し付けあっている。

立花、小林の肩をバンと叩く。

小林「まあ、ね？ 一旦仕切り直してさ、好きないようにやってもらったら？」

春子「（耳に届かず）なんだよ、こんなつまんないネクタイつけて。ウケると思ってるの？」

エレキ「これはポツポ師匠からもらった大事

な……」

春子「ポツポツポツポウっさい！ 知るか、そんな三流芸人」

テル「師匠まで悪く言わんで下さいよ」

春子「こんななんつけてるからダメなんだよ。

外せ、そして巣立て！ ポツポから！」

と、テルの蝶ネクタイを引っ張って外そうとする。

テル「イヤッ！ やめてっ！」

春子、強引に蝶ネクタイを引っ張る。とゴムが長く伸びて取れない。手を放すとパチンと顔面に蝶ネクタイが当たる。テル、倒れる。思わず吹き出す立花の声。  
一同、立花を見る。

立花、持っていたジャケットに顔を埋めるようにして、何とか笑いを飲み込む。

春子、エレキの蝶ネクタイを引っ張って、手を放す。エレキ、倒れる。

立花、我慢出来ずにまた吹き出す。

春子と小林、つられて笑い出す。

\* \* \*

水飲み鳥がコップの水を飲んで、大きく揺れる。

(F・O)

○ 黒味

『4. session』

○ 喫茶コバヤシ・外(夜)

若い客たち、歩いてきて、看板を見つけて店内に入る。

○ 同・店内

新しい客たち、特に若い客たちの姿が多い。常連客たち、珍しそうに周りを見たり、肩を小さくしたりしている。

立花、いつもと変わらず演奏している。

若い客たちも心得ていて、演奏に耳を傾けつつ、それを邪魔しない程度の声で、思い思いの会話を楽しんでいる。

天城、指定席に座って客たちを眺めている。

天城「いいじゃない。繁盛してるんだから」

小林、疲れたように肩をぐるぐる回している。

小林「なんかインターネットの、携帯電話のヤツに写真だか動画だか載せたとかなんか……よくわかんないんだけど」

清美、同世代の若い客と楽しそうにおしゃべりしている。

天城「みんなSNSやってるからね。ちょっとしたことでもあつという間に拡散するし。音楽もサブスクで聞く時代だから、生演奏なんて新鮮なんじゃない？」

小林「前に商店街でも同じようなことやって、一時人が集まって困ったけど、正直今も困ってますよ。さすがに藤間さんも来なくなっちゃったし」

天城「いや、書く方が忙しいみたいよ」

小林「前みたいに静かな方がいいでしょ？」

天城「僕は今の感じの方が好きだけど。にぎやかで」

小林「（少し笑顔を見せながら）あんまり忙しくなってもねエ」

天城「立花さんも楽しそうだよ。なんとなく」

小林「そうですか？」

天城「そりや、観客が多い方がいいでしょ」

立花、いつもと変わらず、静かな曲を演奏している。

天城「あの子が来てからだね」

春子、清美たちとおしゃべりしながら油を売っている。

小林「春ちゃん。仕事は？ 忙しいんだから」

春子「あ、はい」

と、パタパタと店内を行ったり来たりする。

小林「困ったもんです」

と、ニッコリしてカウンターに戻る。

天城「春が来た、ね」

と、ポケットから小銭を出して置く。立

ち上がり、杖をついて帰ろうとするが、腰が痛くなって立ち止まる。

小林、天城のそばに来る。

天城「あー、すいませんね」

小林「春ちゃん。ちよつと留守番お願いね」

春子の声「はい」

小林、天城に付き添って店を出て行く。

○ 同・外

小林、天城の歩くペースに合わせて、並んで歩いて行く。

○ 同・店内

立花、演奏を終えて休憩している。

春子、コーヒーを持ってくる。

春子「どうぞ」

立花、会釈してコーヒーを受け取る。そのまま目を伏せている。

春子、立花が話してくれるのを待つように、なんとなくその場に残る。

立花、コーヒーを一口飲む。黙っている。  
春子、待っている。

○ 同・外

佐藤千鶴（25）、清水小枝（25）、歩いてくる。千鶴、ギターのケースを持っている。小枝、ウッドベースのケースを抱えている。携帯電話の地図を見ながら、看板を見つけて立ち止まる。

○ 同・店内

立花、ちびちびとコーヒーを飲んでいる。  
春子、まだ立花の横にいて、ピアノの端っこをさわったりしている。と、入口のドアが開く音。

春子「いらっしやいませ」

と、立花の前から立ち去る。

立花、春子の背中を見る。

千鶴、入口で店内に目を散らす。もこもこしたダウンジャケットを着込み、ミリ

タリー物の大きなダッフルバッグをたすき掛けにしている。立花を見つけると、カッと目が大きくなる。

小枝、千鶴に続いて入ってくる。トレンチコートにマフラーを巻いて、実用性重視のメガネを鼻の頭に乗つけるようにして掛けている。

千鶴、テーブルの間をツカツカと通り抜けて、一目散に立花に近付いて行く。小枝、慌てて千鶴の後を追いかける。

千鶴、途中で持っているギターケースを客の頭にぶつけてしまうが、それに気づかず立花の方へ向かう。小枝、千鶴の代わりに客に頭を下げ、千鶴を追う。

立花、コーヒーカップを両手の平で包むように持ったまま、ぼんやりしている。コーヒーから湯気が立ち上っている。ふわっ、と湯気が揺れて、消える。

立花、顔を上げる。

千鶴、立花の前に立っている。赤ん坊の

ように目を真ん丸にして、口元にぎゅつと力を入れて、鼻息も荒い。

千鶴「立花静夫だ。絶対」

立花、その圧に負けて、少し身を引く。

小枝、ウッドベースが客に当たらないように慎重によけながら、ようやく千鶴に追いつく。

小枝「チヅ、待って、落ち着いて」

千鶴「(立花を指さして)見て。ホンモノ」

小枝「こらっ！ ダメでしょ！ なんでそう人を指差すの。こっち来て。私の後ろ」

と、千鶴の腕を引っ張る。千鶴、小枝の背後に立つ。

小枝「ごめんなさい。色々失礼なことを(と

何度も頭を下げる)」

立花「(会釈する)」

小枝「清水小枝といっています。こっちは佐藤千鶴っています。それで」

千鶴「(指さして)この人は立花静夫」

小枝「こらっ！ ダメでしょ！ なんでそう

人を呼び捨てにすんの」

千鶴「(ニヤニヤしている)」

小枝「ホントごめんなさい」

立花「(会釈する)」

小枝「それで、えっと……失礼ですけど、立花静夫さん、でしょうか？」

立花「(うなづく)」

小枝「あっ……すごい……ホントだ」

千鶴「だから言ったじゃん」

小枝「シッ！ 黙って」

千鶴「はい」

小枝「ごめんなさい」

立花「(会釈する)」

小枝「あの、私たち、あなたの大ファンで」

千鶴「語らせろ」

小枝「(千鶴の口をふさぐようにして) たまたま私の友達がSNSでこのお店のこと見つけて、それで、ピアノがある喫茶店って近くなかったから、楽しそうだから今度行ってみようよ、って話してて」

千鶴「言い出しっぺ。ハイ（と挙手）」

小枝、携帯電話をいじりながら、

小枝「それで、色々写真とか見てたら、このピアノ弾いてる人って立花静夫さんじゃない？ ってなって」

と、SNSの写真を見せる。

客の背後に立花の後ろ姿が写っている。

千鶴「最初に気付いた人。ハイ（と挙手）」

小枝「でも、最後のコンサートから十年くらい経つし、なんか海外に行ったなんて噂もあつたから、人違いかもって言ってたけど……本人だった」

千鶴「私ゼツタイ本人だつて言った」

小枝「うん。チヅは最初から間違いないって言ってたけど、他の友達がね、人違いかもって」

千鶴「私は言ってない」

小枝「チヅは言ってないよ。言ってない」

立花、手の中のコーヒーカップを見たまま、じつとうつむいている。

客たち、千鶴と小枝のやりとりをチラチラ見たり、なんとなく気にしている。

千鶴「私の番ね」

と、小枝の前に出てきて、

千鶴「一四才。父ちゃんに連れられてコンサート行ったの。マジでイヤだった、だってピアノとか、ジャズとか、絶対つままないじゃん。スカイツリー見たかったからついてったけど」

小枝「こらっ！ ダメでしょ！ なんでそうつままないとか言うの」

千鶴「と思ったけど、違ってたってこと。もう、ピョーンって、ピョーンって、ボイーンってなった」

小枝「何それ？」

千鶴「（心臓を拳で叩いて）マイ・ハート。心驚掴み？ っていう言葉あったっけ？」

小枝「要するに感動したんでしょ？」

千鶴「イヤ、そーじゃないんだよ。要すれないんだよ。やっぱピョーン、だな」

小枝「感動したのね」

千鶴「東京、名古屋、福岡、で東京？ あ、

埼玉、東京か。全部行った。学校休ませて

ーって、親に土下座して。お年玉十年前借

りさせてーって、親に土下座して」

小枝「親に土下座して？」

千鶴「親に土下座して」

春子、来る。

春子「いらっしやいませ。席、どうぞ」

小枝「あ、はい」

春子「ご注文は？」

小枝「えっと、じゃあ、コーヒー二つ」

春子「今、マスターちよつと出ちやってるか

ら、少し待ってもらえます？ すぐに戻っ

てくるんで」

小枝「あつ、はい」

春子、千鶴と小枝の楽器を見る。

春子「音楽やられてる方ですか？ ミュージ

シャン？」

小枝「いや、好きでやってるだけで。プロと

かじや全然ないです」

千鶴 「(立花を指さして) きっかけはこの人」

小枝 「なんでそう指さすの？」

春子 「立花さんの演奏聞きに来たんですか？」

小枝 「もちろん」

千鶴 「いくらだ、いくら払えばいい？」

春子 「えっ？ 何が？」

千鶴 「コンサートのチケ代だ」

春子 「ないよ、そんなの」

千鶴 「ない？ 何を言っている？」

春子 「空いてる席テキトーに座って聞いて」

小枝 「ホントに？」

春子 「ホント」

千鶴 「……おいおい、どうかしてるぜ」

と、たすき掛けにしていたダツフルバッグを開けて、ごそごそと中をかき回す。

菓子パンとかせんべいの袋とかがたくさん出てくる。

千鶴 「ちよつと置かせて？」

と、それらの袋を次々と立花の膝の上に

置いていく。

小枝「こらっ！ ダメでしょ！」

と、慌てて袋を取り上げて、自分で抱えて持つ。

小枝「なんでそう、もう、なにやってんの、すいません」

立花、黙って顔を伏せている。

千鶴、ダツフルバッグの底の方からCDアルバムを引っ張り出す。

立花、CDアルバムをちらっと見る。

千鶴、CDアルバムを春子の前に差し出す。

千鶴「本人だぜ？」

立花がピアノを演奏している写真が、アルバムのジャケットになっている。コンサートの本番中に撮られたもので、ステージ衣装を着て必死に演奏している。強い照明の光に額の汗が光っている。

アルバムタイトルは『my name is blue』。

春子「ふーん。若いね」

千鶴、アルバムのケースを開ける。CDに直接立花のサインが書いてある。

千鶴「サイン入り」

春子「CDに直接書いてもらったの？ ケースじゃなくて」

千鶴「ケースに書いたら消えちゃうじゃないか。擦れたり、汚れたりして」

春子「そっか。考えてんだ、いろいろ」

立花、飲みかけのコーヒーを鍵盤蓋の上にそっと置く。

小枝、千鶴のダッフルバッグに菓子パンの袋などを次々詰め込みながら、

小枝「もう座ろうよ。ここにいたら演奏の邪魔になるから。（立花に）すみません。大人しくしてますので」

千鶴「さて、十年でどれだけ腕を上げたか」

小枝「なんでそう……行くよ、もう」

春子「楽器、どっかその辺の空いてるところに置いて下さい」

立花、ゆっくり立ち上がる。無言でピアノ

ノの前を離れる。春子、千鶴、小枝、立花を目で追う。

春子「立花さん」

立花、春子の声にも振り返らず、店を出て行こうとする。

小枝「どうしよう……怒っちゃった」

千鶴「（小枝に）おせんべい、嫌いだった？」

小林、天城の付き添いを終えて戻ってくる。立花、小林とすれ違いざまに会釈して、店を出る。小林、立花の背中を黙って見送って、店に入る。

\* \* \*

水飲み鳥の動きが、ゆっくり止まる。

○ 小さな公園

立花、ベンチに座っている。

すべり台には誰もいない。

立花、ベンチを立つ。

すべり台のそばに行く。すべってくる子供と、子供を受け止める親がそこにいる

かのように、無人のすべり台を見ている。  
立花、はしごを登ってすべり台に上がる。  
頂上に立つと、思わず腰が引ける。なん  
となくまわりに目を散らして気にする。  
誰もいないとわかって、すべる。途中で  
止まってしまふ。体がはまって動けなく  
なる。なんとか抜け出そうとする。が、  
変にはまってしまつて動けない。  
あきらめて仰向けになる。  
しん……、としている。

○ 街の夜空

○ 喫茶コバヤシ・外

看板の明かりは消えている。カセットテ  
ープの雨の音。

○ 同・店内

ピアノ。

春子、カウンター席に座っている。テー

プレコーダーで雨の音を聞きながら、頬杖をついてピアノを眺めている。

鍵盤蓋の上に立花が置いたコーヒーカップがそのままになっている。ジャケツトは掛かったまま。楽譜集もそのまま。

春子、ピアノのそばに行く。

コーヒーカップを取る。楽譜集が目に入る。しばらく見た後、コーヒーカップを置いて、楽譜集を手に取る。表紙を開いて、中を見る。

ピアノのスタンダード曲を集めた市販されている楽譜。めくっていくと、古い写真が挟まっている。

春子、写真を手に取って見る。

小さな女の子（長谷川青が五才の時）がすべり台をすべって笑っている躍動感のある写真。女の子を受け止めようとしている母親の横顔も少し写っている。

春子「……」

写真を元通りの位置に挟み、楽譜集を閉

じる。

楽譜集を元あったピアノの上に戻す。コーヒーカップを持って、カウンターへ行く。と、ドアの開く音がして、目を向ける。

立花、寒そうに肩をすぼめて入ってくる。春子を見て、少し深めに会釈する。

春子「お帰りなさい」

立花、ピアノのそばに行く。ジャケットと楽譜集を取る。

春子「（コーヒーカップを見せて）コーヒー淹れます？」

立花、拒否するように手を上げて、そのまま店を出て行こうとする。

春子「さっきの女の子たちが、すいませんでした、って。そう言っていました」

立花「……」

春子「また来たいって言うから、いいですよ、って答えたけど。いいですか？」

立花、うなずいたようにも見えないように、

あいまいに首を傾げる。逃げるように、  
ドアの方へ歩いて行く。

春子「お店、やめるんですか？」

立花、ドアを開けようとして、立ち止まる。

春子「理由はなんなのか知らないけど、でも  
なんにせよ、やめ方、つてあると思います  
けど」

立花、ドアに伸ばした手が宙ぶらりんになる。

春子「これが最後の機会かもしれないから一  
応……私に聞きたいことあります？」

話の途中でドアの開く音。春子、サッと  
目を向ける。

ドアから出ていく立花の後ろ姿がチラッと見える。

春子、立花の後ろ姿を少し見送る。テー  
プレコーダーの停止スイッチを押す。

\* \* \*

水飲み鳥がぴたりと静止している。

○ 小さな公園（夕方）

ベンチには誰もいない。

すべり台には誰もいない。

すべり台の前に『使用禁止』の貼紙。

○ 商店街（夜）

誰もいない。

○ 喫茶コバヤシ・外

看板の明かりが消える。

○ 同・店内

壁掛け時計が十時を回ろうとしている。

小林、カウンター奥の椅子に座って、  
ウトウトしている。

千鶴と小枝、テーブル席に座っている。

千鶴、スナック菓子をポリポリかじっている。  
小枝、携帯電話をいじっている。

春子、カウンター席のドアに近い椅子に

座り、テーブルに上半身を投げ出すようにしてドアの方を見ている。

千鶴、壁掛け時計をじつと見る。スナック菓子の袋の口を洗濯バサミではさんで、ダッフルバッグの中に詰め込む。小枝を肘で突つつく。小枝、壁掛け時計を見て、携帯電話をカバンにしまう。二人、席を立つ。

千鶴、二人分のコーヒーカップをカウンターに持っていく。うたた寝している小林を起こさないように静かに置く。

小枝、春子を見て、カウンターのレジ台に行き、自分でレジを開けて代金を払う。

小枝「（小声で）お釣り取るよ」

春子「あつ、ごめん」

千鶴と小枝、店を出て行こうとする。

小枝「おじゃましました」

千鶴「またね」

春子「なんかお腹すいた。すかない？」

千鶴「すいた」

小枝「さつき食べてたじゃん」

千鶴「でもすいた」

小枝「あんまり遅くに食べると良くないよ。

朝もたれるよ、胃」

春子「小倉トースト食べる？」

小枝「食べる！」

千鶴「うん」

春子、カウンターの中に入り、小林を起

こさないようにしつつ、準備を始める。

千鶴と小枝、カウンター席に座る。

春子、オーブントースターに食パンを入

れて焼く。

春子「バター塗る？」

千鶴「塗る。いっぱい」

小枝「私やめとく。……あ、やっぱ塗る」

春子、冷蔵庫から小倉あんを取り出す。

春子「どーん。手作りのあんこ」

小枝「すごい。手作り？」

千鶴「えっ、あんこって作れんの？」

春子「作れるよ。私が作ったんじゃないけど」

小枝「あんこって小豆でしょ？ 小豆を……」

どうすんの？」

春子「……ゆでんじやないの？」

千鶴「えっ、小豆って、お赤飯じやないの？」

小枝「そうだよ」

千鶴「じゃ、炊くんじやない？」

小枝「そっか」

春子「炊いて、なんか、潰すんじやない？」

千鶴「あんこって小豆じやないでしょ。だってお赤飯甘くないじゃん」

春子「……そうだな」

小枝「あんこは小豆だよ。逆にお赤飯が小豆

じやないんじやない？」

千鶴「えー、小豆だよ。だって小豆色だもん」

春子「アレじやない？ 両方とも小豆だけど、

品種が違うんだよ。品種改良でき、甘い小

豆作ったんだよ」

小枝「甘小豆、みたいなの？」

春子「そう。例えばね」

千鶴「甘くできるの？ そんなんできんの？」

春子「できるよ。すごいもん、品種改良って」

千鶴「へー。じゃ、なんでも甘くしちやえば

いいのにな。ピーマンとか」

春子「あるよ。甘いヤツ」

千鶴「ウソだあ」

春子「あるある。うん」

小枝「えっ、それってホントに甘いのか？ 野

菜の甘味的なヤツじゃなくて？」

春子「イヤ、あんこの小豆みたいには甘くな

いよ。でも甘いやつ」

小枝「ウソ？」

千鶴「マンゴーじゃないのか？」

春子「おい、バカにすんな？ ピーマンとマ

ンゴー間違えるか」

小枝「名前似てる」

千鶴「あんな苦いのが甘くなるワケない」

春子「だから、それも品種改良の力よ」

小枝「でも逆に怖くない？ なんか味を操作

してるみたいで」

春子「小豆にお砂糖入れりゃあいいのにな」

小枝「ね」

千鶴「……。あんこってさ、作れんの？」

チン、とオーブントースターが鳴る。

小林、目を閉じたままニヤニヤしながら話を聞いている。

カラン、とドアの開く音。春子、千鶴、

小枝、ドアの方を向く。

立花、入ってくる。カウンター席の方に目をやって、誰に向かってするでもなく会釈をして、店内を横切って奥へ行く。ピアノの前に行く。楽譜集を上屋根に置き、上着掛けにジャケットを掛ける。椅子に座り、鍵盤蓋を開ける。しばらくじっとしている。

壁掛け時計は十時をだいぶ過ぎている。

立花の背中。

鍵盤の上に指を乗せて、演奏を始める。

立花が作曲した曲（アルバムの表題曲で曲名はmy name is blue）を演奏する。

明るくて軽快で、シンプルな曲。

立花の演奏がしばらく続く。と、ギターとウッドベースの音。

千鶴と小枝、それぞれ楽器を持ってきて、演奏に加わる。

立花、千鶴と小枝に会釈をする。

三人の演奏が始まり、店内がふわっとした楽しい雰囲気になる。春子、人数分の小倉トーストを作る。小林、春子を手伝う。

\* \* \*

水飲み鳥がコップの水を飲んで、大きく揺れる。

(F・O)

○ 黒味

『5. blue』

○ 空

青空に綿雲が浮かんでいて、遠くの雲は積乱雲になりつつある。

○ 小さな公園

すべり台が鮮やかな色に塗り替えられている。小さな女の子と、数人の子供たちが楽しそうに遊んでいる。親の姿は見えない。

○ 喫茶コバヤシ・外

ドアに『CLOSE』の札。

○ 同・店内

立花、じっと見つめている。

楽譜集を開いている。

ピアノの前の椅子に座っている。シャツの袖をまくっている。上着掛けにいつものジャケットはない。

楽譜集に挟んでいた写真を取ってシャツの胸ポケットに入れる。楽譜集を閉じ、ピアノの上屋根に置く。

店内には立花一人しかいない。

階段の下に春子の荷物がまとめて置いてある。

立花、椅子を立つ。

春子の荷物の段ボール箱を開ける。箱の中からテープレコーダーとカセットテープを取り出す。

テーブルに置く。カセットテープを入れ、再生スイッチを押す。

ピアノの前の椅子に戻り、椅子に浅く腰掛ける。

テープレコーダーの再生が始まる。サー

……、と雨の音が聞こえる。

立花、視線を上げて、ぼんやりしている。ポーン……、と鍵盤を弾く音。

強張った人差し指が鍵盤を押さえている。立花、ぼんやり視線を上げたまま。

続けて、同じ鍵盤を指先で叩くように弾く。

ぼんやりしたまま。鍵盤を繰り返して弾く。窓から春先の陽が差し込んで、店内が白

く膨らんだように明るい。サー……、と  
いうカセットテープの雨の音と、ポーン  
……ポーン……、という心音のように固  
いピアノの音が続く。  
カラン、とドアが開く。

立花、パツと少し腰を浮かすようにして  
ドアの方を向く。

小林、帰ってくる。両手に買物袋を持っ  
ている。

小林「はあ、着いた。もう春だねえ。汗かい  
ちやった」

立花、ごまかすように会釈して顔を戻す。

小林、雨音に気づいてテープレコーダー  
をちらつと見て、カウンターに入る。

小林「若い子が喜ぶものなんてわかんないか  
ら、とにかく色々買ってきたけど」

と、買い物袋を置く。

小林「はあ……なんか疲れたな」

と、コップに水を注いで飲み干す。どつ  
かりと椅子に座る。寂しげに笑う。

小林「いい年してなに浮足立ってんだらうね」

と、立花を見る。

立花、どこか上の空。小林の視線に気づいて、ごまかすように口元で笑う。

小林、宙に視線を放ったまま、独言のよう続ける。

小林「やっぱり送別会みたいなのはやんないほうがいいのかな。今の若い人はあんまりそういうの好きじゃなさそうだしな。引越し蕎麦だけ食べに行くか。……ああ、おじさんから誘うのはハラスメントになるのか？ どうしようか……」

と、椅子を立てて買物袋を片付けようとする。階段の下の春子の荷物に気付く。

小林「あ、下ろしてくれたの？ 荷物」

立花「（うなづく）」

小林「悪かったね、重かったでしょ。帰ってくるの待ってれば手伝ったのに」

と、買物袋を片付ける手を止めて、

小林「立花さんには色々と謝らないといけな

いな」

立花「(小林を見る)」

小林「いや……なんて言うかね……なんとなくそんなのかなあとは思ってたけど、そんなに有名なプロの人だとは思わなくて」

立花「(頭を下げる)」

小林「いやいや、やめてよ。こっちの立場がないじゃない。だったら、そこはさ、お互い様ってことでさ、そうしましょうよ」

立花、顔を上げて、小さくうなずいて少し笑う。

小林、ハーツ、と深呼吸するように大きく息を吐く。

小林「……お酒飲むの？」

立花「(ちよこつと、と指で)」

小林「あ、じゃあ一緒だ。安上がりでいいよね」

立花「(ウンウン)」

小林「今度飲みに行きましようよ。……間に合うかな、もう冬も終わりだから。駅の向

こうにねえ、北海道産のあん肝を出す店があるのよ。汚い店だけど。ポン酢じゃなくて、表面をカリッと焼いた、コテコテのあん肝をさ、辛い日本酒でさ、ね。そんな気分だな」

立花「(うなずく)」

小林「ま、色々話しましょう。お互い」

立花「(うなずいて、少し笑う)」

カラン、とドアが開く。

立花、不意をつかれて驚いて、パツとドアの方を向く。

春子、入ってくる。

立花、春子を見て、口元に少し力が入る。

春子、立花を見る。

小林「おかえり」

春子「あつ、ただいま」

小林「荷物ね、立花さんが下ろしてくれたよ」

春子「ありがとう」

立花、シャツの胸ポケットに手を当てる。

長谷川青(25)、春子に続いて入ってくる。

る。パーカーとジーンズに、厚ぼったい古着のツイードのジャケットを着ている。口元を固くして、春子の後ろから覗き込むようにして店内に目を散らす。

立花、青を見る。

青、立花を見る。

立花、すぐに顔をそらすように背を向けて、ピアノの方を向く。

青、立花の背中を見て、少しうつむく。

春子、立花の背中をちらちら気にしながら、

春子「（小林に）あ、友達です。荷物運ぶの手伝ってもらおうと思って」

小林「ああ、そう」

春子、パチパチと瞬きの数が多くなる。

服の裾をコンコンいじりながら、

春子「はい。それで……あ、同じ劇団の仲間」

小林「じゃ役者さんなの？」

春子「そう。一番下っ端。私と一緒に」

立花、背中を向けたまま。

青、ゆっくり顔を上げる。立花の背中を見て、思わず口元がゆるんでくる。じわじわと笑顔になる。

小林「（青に）どうも」

青「（ポンと会釈する）」

青、ジャケットを脱いでカウンター席の椅子にかける。春子の背後から体を出して、立花の方を向く。

小林「送別会みたいなのをやるのかなと思つてさ、色々買ってきたんだけど」

春子、立花の背中を気にしている。

春子「そんな、気使わなくていいです。ごめんなさい、急に出ていくなんて」

小林、買物袋から中身を取り出して並べていく。次々と甘いものばかり出てくる。

小林「あれ？ おかしいな、甘いものばっかだ。色々買わなかったっけ……」

春子「いいです、そんな……（と立花を気にしている）」

小林、パーティーグッズを出して見せる。

派手なとんがり帽子をかぶり、『今まさにクライマックス!』と書かれたおもしろタスキを掛ける。

小林「どう? 百円」

春子、気もそぞろに愛想笑いをして、

春子「荷物運ばないといけないから」

立花、背を向けたまま。

小林の声「なにか手伝えることある?」

春子の声「ううん。大丈夫」

小林の声「荷物はどうやって運ぶの?」

春子の声「引っ張って行きます。来たときみ

たいに」

小林の声「重いでしょ」

春子の声「平気。お手伝いもいるし」

小林の声「ここから歩いていける距離なの?」

春子の声「ううん、遠い。でも電車に乗って

いくから」

小林の声「ちよつと前まで車あったんだけど

ね。売っちゃったんだよなあ、乗らないか

ら」

春子の声「ホント、大丈夫ですから」

小林の声「引越し蕎麦食べに行く？」

春子の声「引っ越し蕎麦？ 引越し蕎麦って、

ご近所さんに配るんじゃないんですか？

あいさつするときに。食べるんじゃないくて」

小林の声「……そうだけ？」

立花、見つめている。

視線の先に鍵盤がある。テープレコーダ

ーの雨の音が少しずつ大きくなっていく。

鍵盤蓋を閉じる。

春子、立花が鍵盤蓋を閉じたのを見て、

少し黙る。

小林、少し改まったようになって、

小林「仕事、続ける気はない？」

春子「……」

小林「お客さんも寂しがるし。電車賃くらい

なら出すよ。というか、部屋出ていかなく

てもいいんじゃない？」

立花、半身をこちらに向ける。

春子、立花の横顔を見て、少し頬がゆる

む。初めて青の方を気にする。

青、春子の視線に気づいて、目を合わせる。

春子、クン、と鼻を鳴らして、少し背を伸ばして、

春子「もう春ですね。きれいな青空」

小林「え？ ……ああ、今日は上着いらないね。買物行ったら汗かいた」

春子、青の言葉を待って少し黙る。チラチラと目配せする。

青、黙って立花を見ている。

立花、青に横顔を向けたまま。

春子「青空といえば、ホラ、何だっけ、あなたのこと……名前は……」

青「（春子を見て小さく首を振る）」

立花、立ち上がる。

青、春子の少し前に出る。

立花、目を伏せたまま、青の方を向く。

青、立花と少し離れて向かい合う。

春子、服の裾をぎゅっと引っ張って青を

見ている。

小林「あ、そうだ。アレ、水飲み鳥。気に入ってたでしょ？ 持ってっついていいよ」

春子「……」

小林、返事をしない春子を気にして、パーティーグッズの帽子とタスキをつけたまま、真顔で春子を見る。

小林「どうしたの？」

と、次に青を見る。

テープレコーダー。サー……、と雨の音が聞こえる。

立花、少し顔を上げる。口元がぐっと固くなっている。

青、ゆったりした穏やかな笑顔。

春子、肩がぐっと固くなって、手を握りしめたまま、青を後ろから見守っている。

青、パツと笑って、

青「（明るく）老けたねっ」

立花、思わず目を上げ青を見る。少し口元がゆるんだようになる。

青、ニコニコ笑っている。

立花、長く息を吐く。一回うつむいて、少しして顔を上げる。

青、笑顔が静かに消えていく。

立花「……（スツと息を吸い込んで）」

\* \* \*

水飲み鳥が水を飲んで揺れている。カセツトテープの雨の音。

(F・O)

○ 黒味

ガチャツ、とテープレコーダーの停止ス イッチを押す音がして雨の音は消える。

○ 喫茶コバヤシ・外

(エンドクレジットが始まる。以下、セ リフは聞こえない。)

春子、続いて小林、店から出てくる。

小林「どうしたの？ あの子、誰？」

春子、足踏みするように体を揺らして、

こらえきれず涙ぐむ。

小林「……ちよつと？ 大丈夫？」

春子「親友です、一番の親友。もし立花さんが悪い人だったら、父親だとしても会わせたくなくて。だから」

小林「……（呆然と）」

春子「ごめんなさい。ずっと隠してて」

と、頭を下げる。

小林「……ま、ゆっくり話聞かせてよ（と）まかすように笑う」

春子、顔を上げる。涙を乾かすように、目元を手の平でパタパタあおぐ。小林を見て、思わず失笑。

春子「センス悪っ」

小林、帽子とタスキを取る。

小林「あげるよ」

春子「いららない、いららない」

と、帽子とタスキをドアの取手に引っ掛ける。思い切り伸びをして歩き出す。小林、春子についていく。

小林 「あん肝、好き？」

(おしまい)